



福岡医発第 647 号 (総)
平成 24 年 6 月 2 日

各 医 師 会 長 殿

福 岡 県 医 師 会
会長 松 田 峻一良
(公印省略)

第 71 回 (平成 24 年度) 「西日本文化賞」候補者の
推薦について(お願い)

標記について、西日本新聞社より推薦方依頼が参りました。

つきましては、別添の賞規定及び、下記の募集規定をご参照の上、該当者があ
りましたら、6 月 30 日 (土) までに本会宛ご推薦下さいますようお願い申し上げま
す。

なお、該当者がいない場合もその旨ご連絡願います。

【募集規定】

1. 別紙候補者用紙に必要事項をご記入ください。
2. 推薦理由ならびに業績内容は、できるだけ詳細にご記入ください。また、
参考資料のある場合は添付してください。
3. 資料は原則として返却いたしません。ただし、返却を要する場合は、業
績欄の番号をマル印で囲んでください。

平成24年 5 月

関 係 者 各 位

西日本新聞社

代表取締役社長 川崎 隆生

第71回（平成24年度）

『西日本文化賞』候補者の推薦方お願い

西日本新聞社は西日本地区の文化の発展に資するため『西日本文化賞』を設け、毎年学術および社会文化部門に貢献された方々を表彰してまいりました。受賞者は昭和15年（1940年）に本賞が設定されて以来、昨年度までに347件318人38団体にのぼっています。今年は71回目を迎え、11月3日の文化の日に贈呈式を行うよう候補者の選考準備をはじめています。

つきましては、本賞の趣旨をご賢察のうえ、候補者をご推薦賜りたくお願い申し上げます。

【賞規定】

1. 西日本文化賞

賞状および記念品、副賞（100万円）を贈呈します。

2. 受賞者数

①学術文化部門

②社会文化（産業技術、社会事業、芸術）部門

各部門で原則2件とします。ただし、該当者がいないときはこれを除くことができます。

3. 表彰範囲

九州・沖縄出身もしくは居住者（個人および団体を表彰、九州・沖縄出身は国内居住者に限る）。

4. 受賞者の選考方法（二段階選考方式）

官公庁、学校、研究機関、産業文化など団体の推薦（社会文化その他特殊のものについては個人の推薦も可）による一次審査（別紙候補者用紙のみの書類選考）の後、参考資料なども選考素材とする最終審査を行い、決定いたします。

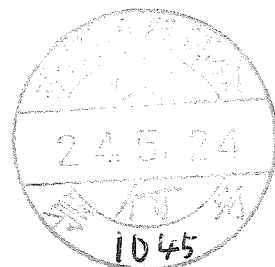
審査のため西日本新聞社内に「西日本文化賞審査委員会」を設け学術・社会文化部門につき慎重に審査します。審査の過程において随時各界の学識経験者の意見を照らし合わせて選考の公平を期します。

5. 発 表

平成24年10月下旬西日本新聞紙上に掲載し、推薦者と受賞者あてに通知します。

6. 贈呈式

毎年11月3日（文化の日）に行います。



【募集規定】

1. 参考のために、前年度までの受賞者一覧表を同封いたします。
2. 別紙候補者用紙に必要事項をご記入ください。
3. 各部門とも候補者数の制限はありません。用紙は必要に応じてコピーしてください。
4. 推薦理由ならびに業績内容は、できるだけ詳細にご記入ください。一次審査に通過した方については、業績としての参考資料の送付を事務局からお願いする場合があります。
5. 資料は原則として返却いたしません。ただし、返却を要する場合は、事務局までご連絡ください。
6. 候補者の略歴について、記入様式の規定はありません。
7. 一次審査の候補者の推薦は7月13日（金）までに、〒810-0001福岡市中央区天神1丁目4-1 西日本新聞会館14階 西日本新聞イベントサービス内『西日本文化賞』係へ郵送してください。

T E L (092)711-5491 F A X (092)731-5210

第71回（平成24年度）西日本文化賞候補者

部 門	学 術 文 化 ・ 社 会 文 化
候補者(団体)名	ふりがな
肩 書 ・ 職 名 (団体・代表者)	
生 年 月 日	19 年 月 日 (11月3日で満 歳)
出身地または 本籍地	
住 所	〒 TEL () - ・ FAX () - e-mail
出 身 校 (最終学歴)	
略 歴	
推 薦 者	ふりがな
肩 書 ・ 職 名	
連 絡 先	〒 TEL () - ・ FAX () - e-mail ※文化賞事務局よりご連絡する場合に必要な連絡先になります。
推 薦 理 由	

※必要に応じてコピーしてください。（裏面付）

主な業績（著作など）

1.

2.

3.

4.

5.

6.

7.

8.

9.

10.

賞 歴

1.

2.

3.

4.

5.

6.

『材料強度学の応用研究の発展に貢献』

佐賀大学理工学部教授 西田新一氏

〔社会文化部門〕

『考古学研究の傍ら、文化財専門職員を指導育成、助言を続け九州の文化財保護行政発展に貢献した』功績

別府大学名誉教授 賀川光夫氏

『独自の幻想的な小説群を発表、九州の文学の向上発展に寄与した』功績

作家 村田喜代子氏

第五十八回 (平成十一年)

〔学術文化部門〕

『九州中世史研究に寄与し、県市町村史編纂・監修などで地域文化向上に貢献した』功績

九州大学文学部名誉教授 川添昭二氏

『沖縄県の長寿メカニズムを遺伝子レベル、ライフスタイルの面などから幅広く研究した』功績

琉球大学医学部名誉教授 鈴木信氏

〔社会文化部門〕

『北九州市・小倉に滞在した文豪・森鷗外を顕彰した』実績

北九州森鷗外記念会

『福岡からミステリーを軸に優れた作品を発表し続け、九州の文学発展に貢献した』功績

会長 小林安司氏
作家 夏樹静子氏

第五十九回 (平成十二年)

〔学術文化部門〕

『東洋思想の研究に長年取り組み、日本人の精神文化を広く紹介した』功績

九州大学名誉教授 岡田武彦氏

『紫外線などで傷ついた遺伝子のDNA修復酵素を世界で初めて分離同定し、発がん抑制との関連を明らかにするなど、生物の生命維持メカニズムを解明した』功績

福岡歯科大学教授・九州大学名誉教授 関口睦夫氏

〔社会文化部門〕

『「医は農に、農は自然に学べ」の思想で、養生説法を25年間にわたり広め続けた』功績

医師・公立菊池養生園名誉園長 竹熊宜孝氏

『日本キリスト教史、とりわけ長崎を中心とするキリシタンの研究と教育、地域への普及に果たした』功績

長崎純心大学学長 片岡千鶴子氏

『部落問題を中心とする人権に関する理論・学術研究と啓発活動』での功績

福岡部落史研究会殿

(会長・森山沾一福岡県立大学教授)

第六十回 (平成十三年)

〔学術文化部門〕

『医学、生物学の領域における細胞組織の分子解剖学的電子顕微鏡的研究、特に「消化吸収機構の分子解剖学的研究における』功績

中村学園大学学長、九州大学名誉教授 山元寅男氏

『日本における廃棄物工学のパイオニアで「準好気性埋立構造」を開発し、その技術を「福岡方式」として日本全国、アジア各国へ広めた』功績

福岡県リサイクル総合研究センター長 花嶋正孝氏

〔社会文化部門〕

『障害者との共同生活の家を38年間運営。その実践が、障害者の自立と教育、地域福祉に貢献した』功績

近藤原理氏
障害者共同生活の家「なすな園」運営 美佐子氏

『福岡から恋愛小説を中心に優れた文学作品を発表し続け、日本の文学に寄与した』功績

作家 高樹のぶ子氏

第六十一回 (平成十四年)

〔学術文化部門〕

『炭素の構造をナノ（十億分の一）単位で解析し、化石燃料の高度利用と高性能の炭素材を開発した』功績

九州大学機能物質科学研究所教授 持田勲氏

『角膜治療の基礎医学的研究や治療法の開発において世界に先駆けた成果を上げた』功績

山口大学医学部教授 西田輝夫氏

〔社会文化部門〕

『全国から姿を消しつつあった水車の動態保存に力を注ぎ、水車を軸にした多彩な文化活動を展開した』功績

日本水車協会会長 香 月 徳 男氏

『白磁の技術的水準を高め、伝統磁器に独自の作陶世界を広げた』功績

陶芸家、国重要無形文化財「白磁」保持者 井 上 萬 二氏

『九州国立博物館（仮称）の実現に大きな役割を果たし九州の地域文化向上に貢献した』功績

九州国立博物館誘致推進本部殿

（本部長＝大野茂九州・山口経済連合会長）

博物館等建設推進九州会議殿

（会長＝大野茂九州・山口経済連合会長）

九州国立博物館設置促進財団殿

（理事長＝大野茂九州・山口経済連合会長）

第六十二回 （平成十五年）

〔学術文化部門〕

『朝鮮考古学の研究を通じて日本の考古学に新たな視点を提起し、東アジアと深くつながった古代日本の姿を明らかにした』功績

西 谷 正氏

〔社会文化部門〕

『筑前琵琶の奏者として、その伝統保持と普及に努めた』功績

筑前琵琶福岡旭会会長 中 村 旭 園氏

『多彩な歴史群像を作品化、人間ドラマと歴史を発掘した』功績

作 家 古 川 薫氏

『被爆者の証言を通して被爆の実相を伝え、原爆の非人道性を訴えてきた』功績

長崎の証言の会殿

（代表委員＝濱崎均氏、内田伯氏、廣瀬方人氏）

『博多祇園山笠を全国区の祭りにし、世界に向けて「博多」をアピールした』功績

博多祇園山笠振興会殿
（会長＝後藤久義氏）

第六十四回 （平成十七年）

〔学術文化部門〕

『九州の仏教美術の調査・研究に尽力、修復・保護の面でも多大な貢献をした』功績

九州大学名誉教授 平 田 寛氏

『月刊誌「教育と医学」を発行、医学・教育・心理の各分野の成果を通して現代の社会問題と取り組み、啓発してきた』功績

教育と医学の会殿

『知的障害児の教育施設「しいのみ学園」を創設し、養護教育の発展をリードしてきた』功績

しいのみ学園園長 昇 地 三 郎氏

『農業を続けながら文筆活動を通して、現代の「農と食」の問題を啓発した』功績

農業・作家 山 下 惣 一氏

『わが国を代表する彫刻家として美術文化の発展に貢献した』功績

彫刻家 豊 福 知 徳氏

第六十三回 （平成十六年）

〔学術文化部門〕

『食欲の調節に関する物質を発見するなど生理工学の成果を取り入れた肥満治療法を開発した』功績

中村学園大学栄養科学部教授 坂 田 利 家氏

『分子機械の創製をはじめ世界の分子化学の研究をリードした』功績

九州大学大学院工学研究院教授 新 海 征 治氏

〔社会文化部門〕

『博多・長崎の商人研究と、東アジアの文化交流に尽くした』功績

福岡大学名誉教授 武 野 要 子氏

『高崎山のサルの子の「家系図」を作り、大分観光に寄与した』功績

元高崎山自然動物園ガイド 松 井 猛氏

『長年にわたり国内外の災害や紛争などの被害者救護に取り組んできた』功績

熊本赤十字病院国際医療救援部
（代表＝部長・浅井淳氏）

第六十五回 （平成十八年）

〔学術文化部門〕

『水俣病、とくに胎児性水俣病の臨床的・疫学的研究に尽くした』功績

熊本学園大学教授 原 田 正 純氏

『「文選」「白氏文集」など中国古典文学の研究に尽力し、多くの後進を育てた』功績

九州大学名誉教授 岡 村 繁氏

〔社会文化部門〕

『独創性豊かで芸術性に富む青磁の世界を確立した』 功績

陶芸家、日本工芸会理事 中 島 宏氏

『認知症介護に適した「宅老所」を開設、ケアの質向上に貢献した』 功績

宅老所「よりあい」殿
(代表〓代表・下村恵美子氏)

『実業団プラスバンドとして、地域文化振興に貢献した』 功績

ブリヂストン吹奏楽団久留米殿
(代表〓団長・井上芳治氏)

第六十六回 (平成十九年)

〔学術文化部門〕

『独文学研究やユング著書の翻訳に尽力するとともに、日独文化交流の発展に寄与した』 功績

長崎外国語大学学長 池 田 紘 一氏

〔社会文化部門〕

『西都原の桜や各地の神楽などを描いて独自の画境を開き、宮崎の地域文化を紹介した』 功績

画家 弥 勒 祐 徳氏

『流通経済学の基礎理論の発展に尽くし、九州各都市の商業調査、まちづくり提言活動に寄与した』 功績

九州情報大学客員教授 阿 部 真 也氏

『ホークスの監督として十四年間、

九州のプロ野球ファンに夢と感動を与え、地域の社会文化の向上に貢献した』 功績

福岡ソフトバンクホークス最高顧問 王 貞 治氏

『「福岡古楽音楽祭」を創設して日本有数の古楽音楽祭に育て上げ、地域文化の向上に寄与した』 功績

十八世紀音楽祭協会殿
(代表〓会長・中里隆氏)

第六十八回 (平成二十一年)

〔学術文化部門〕

『九州を拠点に、日本の中国学研究深化と近世儒学研究に寄与した』 功績

九州大学名誉教授 荒 木 見 悟氏

〔社会文化部門〕

『襲名後四半世紀にわたって柿右衛門様式を継承しながら、新しい磁器の創造に尽くした』 功績

陶芸家 第十四代酒井田柿右衛門氏

『裁判傍聴などを通し人間の本質を見つめ、多くの著作に表してきた』 功績

作家、北九州市立文学館館長 佐 木 隆 三氏

『50年近くにわたり、くじゅうの自然保護に貢献した』 功績

九重の自然を守る会殿
(代表〓会長・嶋田裕雄氏)

第六十七回 (平成二十年)

〔学術文化部門〕

『西日本地域の仏教美術研究の基礎を築き、東アジアの交流史研究に寄与した』 功績

九州産業大学教授 菊 竹 淳 一氏

『がん治療の基礎研究をリードし、現在のオーダーメイド治療の基盤を構築した』 功績

九州大学特任教授 桑 野 信 彦氏

〔社会文化部門〕

『九州の戦国史を長年研究し、執筆活動を通じて郷土の武将たちに光を当てた』 功績

九州戦国史研究家 吉 永 正 春氏

『柔軟で斬新な感覚の建築デザインにより、国内外の建築文化発展に寄与した』 功績

建築家 葉 祥 栄氏

『地域の拠点病院をつないだ

独自の産科救急体制システムを構築し、周産期医療充実に寄与した』 功績

宮崎大学医学部教授 池ノ上 克氏

第六十九回 (平成二十二年)

〔学術文化部門〕

『有明海の環境変化の研究など、

国内外で水環境保全に寄与した』 功績

九州大学名誉教授 楠 田 哲 也氏
北九州市立大学教授

『がん治療と予防などに関する研究』の功績

崇城大学教授 熊本大学名誉教授 前 田 浩氏

〔社会文化部門〕

『知的障害者の自立へ向け、

音楽・美術活動を支援した』功績

社会福祉法人福岡障害者
文化事業協会理事長

緒 方 克 也 氏

『戦時中の満州とシベリア抑留体験

などをテーマにした画業』の功績

画家 宮 崎 静 夫 氏

〔注1〕「福日文化賞」を受け継いだ「西日本文化賞」は第6回

（昭和20年4月22日表彰式）後に戦後の混乱期を迎えて、

昭和21年は見送り、翌22年4月13日に第7回表彰を行な

ったが、再び中断した。24年から毎年11月3日文化の日

に表彰することを定めて復活した。また、25年の第9回

から表彰対象を学術文化と社会文化の二大部門に分けた

（「西日本新聞百年史」より）

〔注2〕平成23年の第70回は、表彰を11月13日に延期し、日本文

化の向上に努めた九州にゆかりのある人の功績をたたえ

る第70回記念特別賞を設けた